

られているが、このクラス分けは複合語形成でも重要である。本論文では日本語の主要な 3 つの ER クラス:和語クラス、漢語クラス、外来語クラスに関して主に分析する。日本語の 4 種類の複合語パターンは ER クラスに対して異なった振る舞いを見せる。通常複合語では制限は無く、すべてのクラスで可能である(例:川ウサギ、株式会社、ビーチサッカー)。並列複合語(例:犬猫、エビカニ)および強意・複数重複複合語(例:山々、広々)では和語クラスだけが可能であり、漢語クラス、外来語クラスの語は不可能である。擬態重複複合語は和語クラスと外来語クラスで可能であり(例:縞々、ギャルギャル)、漢語クラスの語は不可能である。また、異なった ER クラスの語の間で可能なのは、通常複合語のみである(例:車社会、サッカー大会)。ただし並列複合語に関しては、多重複合語の内部ではこの制限は消滅する(例:パリローマ同盟、酒ジュース販売)。

連濁に関して日本語の複合語パターンは興味深い変異を見せる。連濁の適用が可能であるのは、通常複合語(例:旅人 *tabi-bito*)と強意・複数重複複合語(例:人々 *[[iito-bito]*)であり、並列複合語(例:親子 *oja-ko*, **oja-ko*)、擬態重複複合語(例:しわしわ *iiwa-iwa*, **iiwa-iwa*)では不可能である。連濁が可能である二つのパターンの間でも相違がある。通常複合語では様々な要素により連濁の適用が阻害されるが、強意・複数重複複合語では音韻論的な条件が整っていれば、連濁は必ず起きる。例えば、通常複合語では連濁の不適用が語彙情報として指定されている語(例:旅先 *tabi-saki*, **tabi-zaki*)であっても、強意・複数重複複合語では連濁が起こる(例:先々 *saki-zaki*, **saki-saki*)。また多重複合語において、右枝分かれ構造では連濁が阻害されるのに対し(例:竹タヌキ籠)、左枝分かれ構造ではそのような阻害は起きない(例:赤目ダヌキ)。

アクセントに関しても日本語の複合語パターンは変異を見せる。本論文では語が元々持っていたアクセントに着目して分析する。通常複合語では一般的な複合語アクセント規則に加えて、一部の語は第二要素が元のアクセントを保持する(例:ネ'コ、ペルシャネ'コ)。並列複合語では第一要素が元のアクセントを保持する(例:は'る、は'るなつ)。二つの重複複合語ではアクセントはそれぞれ特有の規則に則っており、元のアクセントが保持されるということはない。多重複合語では第二要素が複合語である場合、その元のアクセントを保持する(例:てぶ'くろ、かわてぶ'くろ)。

第3章では最適性理論の枠組みにおいて、日本語の複合語形成に関して分析する。第2章で示された日本語複合語の形態音韻論が、自然言語において普遍的な制約の相互作用により生じたものであることを示す。最初に、複合語形成において最も重要な音韻操作である韻律語の結合がどのような仕組みで起こるかという点を明らかにする。次に、複合語における要素の順序が、入力 of 段階では決定されている必要は無く、普遍的な制約の相互作用により導き出されるということを示す。特に、主要部を韻律語の左端に配置することを要求する制約 **HEAD-RIGHT** が日本語の複合語形成

において重要な働きをすることを示す。また、多重複合語において形態論的に関連する出力間の対応関係およびそれに基づいた制約 (LINEARITY-OO、CONTIGUITY-OO) が要素の順序を決定するにあたり重要な働きをすることを示す。最後に、多重複合語において韻律語が分割される現象に対して理論的な説明を与える。

第4章では引き続き最適性理論の枠組みにおいて、日本語複合語における主要な形態音韻現象である、連濁および複合語アクセントに関して分析する。第3章での議論と同様に、これらの現象が普遍的な制約の相互作用により引き起こされることを示す。特に、両者において出力間の対応関係およびそれに基づいた制約が重要な働きをすることを指摘する。また、これらの形態音韻現象における変異を捉えるために、出力間対応関係に関して、二つのクラスを設けることを主張する。連濁現象では IDENT-OO(voice)により、様々な文脈で連濁の適用が阻害されることを示す。アクセントの分析においても IDENT-OO(head accent)の働きにより、第二要素が独立した語として持っているアクセントが複合語においても保持される現象が説明される。

本論文第2章にて取り上げられた日本語複合語の形態音韻論に関するデータは今後の形態論、音韻論およびそのインターフェイスの研究においても、重要な手がかりを提供すると考えられる。また本論文第3章、第4章にて議論された最適性理論での分析は、今後の形態音韻論の理論研究に重要な示唆を与えるものである。